

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

# DePOLA

でぽら

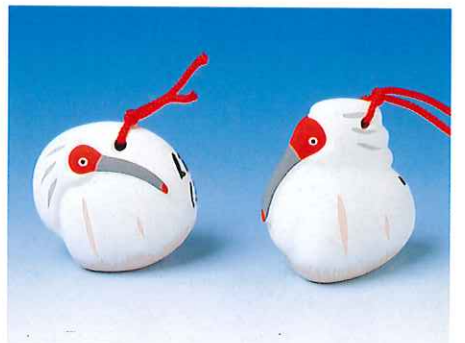
17

'99秋冬号

特集

手作りの温もり、懐かしさを今に伝える

## 郷土玩具・民芸品



# [手作りの温もり、懐かしさを今に伝える——郷土玩具・民芸品]

## 特集企画に寄せて

長い伝統と人の心に支えられてきた郷土玩具は、幼い日や子供の頃の懐かしい思い出を呼び起こしてくれれます。素朴で愛らしい姿は、人々の気持ちを和ませ、それを生み育てた土地の風土や歴史を思い起こさせ、いつしか心はふるさとへと誘われていきます。

そのふるさだが、まだ訪ねたことのないふるさとの場合であっても、今は失われてしまった昔の暮らしや人々の穏やかさ、木や土と親しんだ幼い日の遊びなどを顧みる機会を与えてくれます。

郷土の民芸品は、主として、その地方の特産品といわれるもので、祭りや神事に使われたり奉納するために作られたもの、子供が元気に育つようにと雛祭や節句等に飾るために作られたもの、湯治客や神社の参拝者に土産品として作られたものなどがあります。

これらは、実用性だけではなく、郷土が育んできた工芸品として人々に愛用されてきました。使う材料の稀少性や高度な技術の必要性から、それを伝承するために親から子、孫へと工人としての専門的技術や精神が受け継がれ、現在その多くが伝統的工芸品として、また魅力的な地域資源として、保存伝承が求められています。

「てぼら」17号では、15号の「伝統工芸品に学ぶ」特集に引き続き、郷土玩具・民芸品を特集します。

郷土玩具・民芸品は、その土地や風土が生み育ててきたもの。しかし、風習や行事がさびれてきたために制作が途絶えたり、現在辛うじて存続しているものの工人が高齢化しており、継承が危機的状況を迎えているものが多数あります。

伝統工芸品の場合もそうでしたが、現代は大量生産・大量消費時代で、我々日本人の生活様式や子供の遊びも変化が激しく、時間をかけて手作りする郷土玩具や民芸品の需要は大幅に減っています。工人たちが何とか安定して生活していけるよう、この機会に各地に伝わる郷土玩具・民芸品をできるだけ沢山のの人にアピールし、一つでも多く買い求めたり、産業として存続していくための知恵を出し合っていきたいと痛感しました。

一方で嬉しいことは、ふるさとの民話や風土を素材にして、新しい郷土玩具・民芸品を誕生させている一ターンの若い作家や、古い玩具に新しい時代感覚や実用的要素を加えて継承している後継者たち、失われた郷土玩具の復活に取り組む地域の人々の登場でした。そうした工人を中心に住民等の体験教室が開かれ、出来上がった作品は町村の物産館や観光施設等で売られるようになり、村おこしや町の活性化に役立っています。

あらゆる機会と時代に対応した二一

ズも取り入れながら、これらの愛らしく勇壮で創造性に富んだ郷土玩具・民芸品が、いつまでも私たちの傍らにいてくれるよう願わずにはられません。

長い時間と人情に支えられてきた郷土玩具や民芸品の素朴な色と形、美しさ。本紙ではその魅力を一部しか紹介出来ませんが、この取材記事を通じて、読者の皆さんが、豊かな自然と温もりが息づく日本各地のふるさとを訪ねる機会になればと切望しています。

「てぼら」編集部



◀佐渡の文弥人形・のろま人形

「でぼら」とは——

Depopulated Local Authorities(人口が少ない地域)、つまり過疎地域の意味。わが国の過疎市町村数は1231、全市町村の38%にも達しています。過疎地域は貴重な自然環境と農林水産物の供給地であり、日本の伝統文化や風土が多数残っています。

農山村の活性化と発展をめざすため、地方と都市を結ぶ交流誌として「でぼら」をお届けいたします。回覧し、多数の方に高覧いただければ幸いです。

●写真/表紙①

左側・上から——竹人形(徳島県)/きじ馬(熊本県)/垂水人形(鹿児島県)  
中央・上から——肥前土人形(佐賀県)/小安こけし(秋田県)/佐渡能面(新潟県)  
右側・上から——アイヌ木彫(北海道)/トキ土鈴(佐渡)/吉岐鬼風(長崎県)

●写真/もくじ

上から——フクロウ木彫/湯田町・厄払い人形/土佐風・のぼり/垂水人形

▼吉岐鬼風を制作する土肥茂一さん



[手作りの温もり、懐かしさを今に伝える——郷土玩具・民芸品]  
特集企画に寄せて——2

●森羅万象を神とする、北の大地の民芸品たち——4

(北海道留辺蘂町他)

アイヌ木彫/フクロウ彫り名人/  
ニュークラフト/北方民族の民芸品



●いで湯はこけしのふる里。東北各地にこけし工人を訪ねて——8



- ・森と湖と温泉の山里が育んだこけし(秋田県皆瀬村)——8  
小安こけし/木地山こけし
- ・工人70人、こけしは温泉街の風物詩/鳴子こけし(宮城県鳴子町)——10

●お年寄りが商品化してふるさとの活力剤に厄払い人形(岩手県湯田町)——12

- ・ヒバの香りを玩具に/脇野沢村営木工芸センター(青森県)——13

●鬼太鼓と能楽の島は、郷土玩具の宝庫/佐渡島——14

鬼の面達に迎えられて/能面作り・本間正春さん/トキの新作土鈴作り・神蔵武志さん/人形芝居や民話をユーモア感覚で・葛原正巳さん



■土佐っ子の夢を大空高く/土佐風、フラフ、のぼり(高知県香我美町)  
絵師・染色家 吉川登志之さん——17

■吉岐は鬼伝説の島、風の島。吉岐鬼風300年の伝統を守る(長崎県吉岐勝本町)  
工芸士・土肥茂一さん——20

- ・世界のおもちゃが、こんにちは/[ちゃちゃワールド](北海道生田原町)——19

■肥前の民話を土人形に込めて  
人形師 倉富博美さん(佐賀県多久市)——22

■無形文化財を形にする  
竹人形師 佐岡保さん(徳島県山城町)——24

■大隅半島の素朴な土人形、垂水人形の復活——26  
中島三郎さん(鹿児島県垂水市)

■山里の落人伝説を工人たちが継承——28  
きじ馬・花手箱(熊本県人吉市他)

**INFORMATION** 郷土玩具・民芸品を展示する施設・工房——30

- お知らせ——全国過疎問題シンポジウム'99/平成10年度制作ビデオ「歴史おもてなし—町並み保存と町づくり」ガイド 31

# 森羅万象を神とする

## 北の大地の民芸品たち (北海道 留辺蘂町)

北海道は開拓移住者が入植してすでに100年が経つ。しかし郷土玩具や民芸品に関して言えば、その100年の間に生まれて育ったものの多くは、先住民族であるアイヌの人たちが暮らしの中から生み出したものに、さまざまな影響を受けている。

木彫りの熊や人形で知られるそれらアイヌの民芸品も、今では作り手の数が減り、観光

地で見かける店も以前に比べて少なくなった。森の国・北海道が生んだ木彫の伝統は、どのように変わり、生き残っていくのだろうか。

**自然との豊かな交流が生んだ  
芸術品——アイヌ木彫・能登さん**

北海道東部の女満別空港から、まっすぐ西に伸びる国道を走ること90分。留辺蘂町の木

彫工房「いとう」を訪ねた。ここで、思いがけずにアイヌ木彫を伝承している能登淳一さん(47)に会えることになった。

木彫工房「いとう」は伊藤美樹さんが代表を勤める小じんまりとした家族的な工房だ。今では手鏡やアクセサリーなどがこの工房の主力製品だが、かつては伝統的なアイヌの木彫にも力を入れていた。



土の中に100年間埋まっていた榎の木で作った工房蝦夷・清野さんのフクロウ。

▼能登さんの作る熊はどれも力強い。▶30年来使っている木彫工具



代表の伊藤さんが見せてくれたのが、以前の工房で働いていた木彫作家のアイヌの人が彫ったという木彫りの熊だった。50センチはあるかと思われる鮭喰熊をテーマにした大きなもので、ダイナミックな力強さに溢れている。

この作者が能登淳一さんであるという。現在は体調を崩し休養中だという能登さんに連絡をとったら「いいですよ」と気さくに応じていた。

て駆けつけてくれた。今ではアイヌの人で木彫を続けている人は本当に少なくなつたと聞いていたので、この思いがけない能登さんとの出会いには感謝するしかなかった。

能登さんは子供の頃から彫刻をする父親の姿を見て育つたという。アイヌの人たちの暮らしは、夏は農作業や漁労、冬は狩猟というのが一般的で、その暮らしの合間に木材を使って彫刻をし、生活道具や民芸品を作っていた。

熊の木彫りを民芸品として販売するようになったのは昭和に入ってからで、戦後観光客が増えるに従い盛んになった。

彫刻では熊やニポポと呼ばれるアイヌ人形が有名だが、その彫り方には柳彫、三角彫、丸彫、一刀彫などがある。同じ熊でも親子熊、這熊、鮭負熊、鮭喰熊、吠熊とバリエーションは実に豊か。使われる原木の80%がシナの木で、北海道に多いオンコ（いちい）の木やエンジュも高級品として使われている。

彫刻ばかりではなく、木の皮から繊維を採って織物にした「アッシ織」などもアイヌ工芸の代表的なもので、素材を熟知した高度な技術は、自然との交流の歴史の中で生まれた独特のものと言えるだろう。

能登さんは静かにゆっくりと話した。

「熊を彫る時は下描きは一切しません。原木をジッと見てイメージを固め、あとはいきなり彫り始めます。熊の仕草表情、鮭をくわえる姿などは、さんざんこの目で見てきたので、頭の中に生きてるんです」

森羅万象を神として崇拝し、その恵みに感謝するアイヌの人たちの心は、彼らの作り出すどんなものにも反映されている。自然との豊かな交流は、彼らの天性の造形性をより芸術的なものへと高め、民芸品・工芸品として



▲手鏡の裏にアイヌ女性の顔を彫る尾中さん。



▲木彫工房いとうの木工製品。玩具の楽しさに実用的な用途も加味している。

の魅力を備えていったのだろう。

中学を終えた頃から本格的に彫り始めたという能登さんの木彫の歴史は30年と少々。父から習ったという能登さんの技術を継承する若者は、まだ育っていない。

この木彫工房いとうには尾中和美さんという木彫のベテランもいて、手鏡やペンダントづくりの中心となっている。彼女の彫刻の師は伊藤社長の父・稔さんで、その師匠から習った技術で、尾中さんは手鏡の裏にアイヌの女性の横顔をスイスイと彫っていく。一枚を15分で彫り上げるという見事な速さだ。

▶道の駅にオープンした「果夢林の館」は、留辺蘂町のシンボルにもなっている。



## 林業の町を 元気にしよう

ここ留辺蘂町は町の88%の面積が森林という林業の町。平成10年には町内の国道沿いの道の駅「おんねゆ温泉」の敷地内に、町の林業振興や木材工芸の活性化を目的とした施設「果夢林の館」がオープンした。

施設の中は民芸品や木工芸品を展示販売している「果夢林ショップ」、ジャングルジムや三輪車など木製遊具で遊べる「果夢林ワールド」、そして糸のこや木工作機械の揃った「クラフト体験工房」の三つのパートに分かれていて、終日、観光客で賑わっている。

いろいろな工房の自信作が並ぶ「果夢林ショップ」でひと際目をひいたのが、木彫のフクロウを各種展示していた「工房・蝦夷」と、シンプルなフォルムが美しい「旬大雪創木社」のコーナーだった。

## フクロウ彫り名人から 若い後継者も修業中

気になる工房・蝦夷を訪ねてみた。事務所の入口には、人なつこい猫が二匹寝そべって、何ともアットホームな雰囲気だ。

おが屑の溢れる作業場でフクロウを彫るための作業をしていたのは清野武夫さん(60)だった。原木のエンジュの丸太を製材する「木取り」という工程だ。

フクロウを彫らしたら名人という清野さんは、全くの独学。今までにどの位のフクロウ

を彫ったかは自分でも見当がつかない程だが、「彫れば彫るほど、納得がいくものは出来ないんだね」と、名人ならではの言葉が返ってくる。一人前になるまでには木を見る目を養うことが第一で、どんな木のどんな部分を使うか、木の目を読む力をつけることが肝心だといふ。彫刻刀の柄は使いやすいように、自分の手に合わせて手作りし、刃は毎日使うごとに研いでいる。最も難しいのは目を入れる時で、目の表情ひとつで全体の雰囲気はガラリと変わってくるという。フクロウは英知に富んだ緑起の良い神の鳥として昔から親しまれ、今も変わらずに人気があるのだと社長夫人は言う。

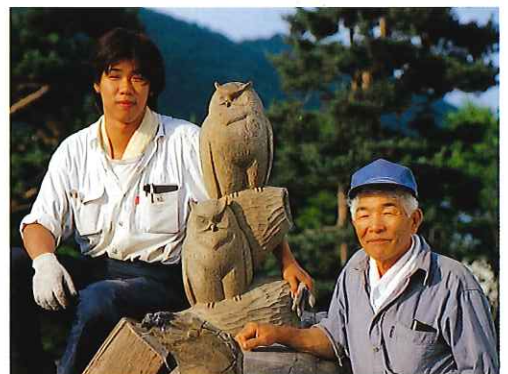
社長の山下繁勝さん(48)や清野さんにとって嬉しいのは、心強い後継者が育っていること。その後継者とは22歳の若者山下賢司さんだ。北海道で酪農をやりたくて京都からやってきた賢司さんは、親同志が知り合いということ、ひとまずこの工房に就職した。「不器用で、とても続かないと自分でも思ってたんですけどね、いい人ばかりで居心地良くて。もっと腕を磨きたいって、欲が出てきたんですね」

と、賢司さん。「京都ではワルかったんですよ」と頭をかきながら言う彼も、今年の6月には結婚してこの地に所帯を持った。

物産展などで中心になって活躍するという彼は、今や工房に欠かせない主要メンバーの



▲原木を見ながら作品づくりの打合せ。清野さん、山下君。



▲清野さん(右)手作りのフクロウの前で(工房・蝦夷)

一人となった。

## 一歩先のニーズを読む

「果夢林の館」で目を引いたもうひとつの作品群に、モダンなフォルムが美しい丹頂鶴や熊の輪投げ、フクロウの靴べらなどの一群があった。きつと感覚のいい若いデザイナーがいるのだろう、そう思って製作元の(旬大雪創木社を訪ねた。

応対に出たのが専務の土田健次さんで、続いて現われたのが代表取締役で健次さんの父親土田康次さんだった。

どんなデザイナーがいるのかと尋ねたら、「ほとんど私が考えています」

と、78歳の土田社長。洗練されたそのデザインはそのままインテリアになるような、現代の暮らしに映える高感度なもののばかりだ。

その社長のオリジナルデザインを効率よく多量生産してくれるのが、昭和50年から導入しているイタリア製コピーイングマシンという機械。オリジナルのモデルを機械にセットすると、3個が同時に削られて出てくる。デ



▲大雪創木社の作品。インテリアとしても人気がある。



▲「昔はこんなアイヌ人形も作っていた」と語る土田社長。



▲型取り、研磨、塗装等に機器を導入して効率アップを図る。



▲ウィルタの資料館「ジャッカ・ドフニ」

リケートな曲線もこれならいとも簡単に大量生産が出来る訳だ。

大雪創木社の主力商品である「丹頂夫婦鶴」は、皇太子殿下・雅子妃のご成婚記念に北海道代表の献上品として選ばれている。

今では店先に並ぶ品のほとんどが、北欧調のモダンな商品中心だが、かつては土田社長もアイヌの伝説に出てくるコロポックルや熊を手彫りで作っていたという。

「やっぱり時代の流れでしょうかねエ。時代のニーズを先へ先へと読んでいくと、民芸品も変わっていかざるを得なくなってきたんです」

と、この町のクラフト協会会長でもある土田社長は話す。時代に即した民芸品づくりを今日も考えている、現役クラフトマンだ。

### 思わぬ歴史が見えてきた 北方民族の民芸品

この取材の旅の途中で、ウィルタと呼ばれる北方少数民族の人たちが、かつて網走に暮らしていたことを知った。その網走で、彼ら

が使っていたといわれる人形を、文献をもとに作っている人がいると聞き、早速網走に訪ねた。

大広民芸製作所の主である大廣茂さんがその人だった。大廣さんの作る人形は「セワポロロ」（招福の使者と呼ばれ、ウィルタの人たちが祭りや儀式に使ったものを、再現したという）。

ウィルタは樺太アイヌの言葉でオロッコと呼ばれ、オロッコ族などという言い方もある。アイヌ文化よりもさらに古いオホーツク文化圏の民族で、トナカイを飼い、遊牧、狩猟、漁労をしながらオホーツク海沿岸の各地を移住した。

かつてはサハリンに750人程暮らしていたが、戦後その一部が網走に引き揚げてきて現在サハリンに残るのは300人余りだという。

大廣さんの作る人形はこけしに似た素朴な木彫りで、首にミンクの毛を巻いている（本物はアザラシの皮）。網走には大廣さんを中心としたオロッコ族の伝承保存会があり、年に

一度、セワという神さまに幸福を願う「オロッコンの火祭り」という観光行事を行なっている。

この網走に、サハリンから引き揚げてきたウィルタの人がたった一人だけ現存していた。北方少数民族ウィルタの衣服や生活道具を展示した、小さな資料館「ジャッカ・ドフニ」の館長北川アイ子さんがその人だ。

民族の文化を守るため、北川さんは有志の人たちとともに、この資料館を訪れる人の案内役を勤めている。資料館には貴重な衣服や遊牧の民の生活具に混ざって、大廣さんの作っていたものと同じ「セワポロロ」の人形も展示されていた。首にアザラシの皮を巻いたその人形を手にとると、北川アイ子さんの遠い日々が、自然の中で心豊かに暮らしていたウィルタの人々の生活が伝わってくるようだった。

文/金山淑子 写真/小林恵

- ・留辺蘂町「果夢林の館」 ☎0157(45)2158
- ・網走市 大広民芸製作所 ☎0152(44)5583
- ・「ジャッカ・ドフニ」 ☎0152(43)1149

▼オロッコンの火祭りの衣装を着た大廣さん。



文献をもとにした北方民族ウィルタの人形

# いで湯はこけしのふる里 東北各地にこけし工人を訪ねて



▲木地山こけし。小椋家四代目久太郎氏の制作。

こけしは日本を代表する伝統的郷土玩具。そのふる里は東北地方で、主要な温泉地には、その土地だけの特色あるこけしがある。江戸時代に木地師が遊び心で作ったというこけしは雪深い東北の山里で発展を遂げ、家業として代々受け継がれてきた。玩具というより東北が誇る文化財、工芸品といえる。

こけしは地元周辺で採れた木を使った素朴な人形。東北に生きる女性たちの姿を描いたものだといわれ、愛らしい表情の中に、人々の心を癒し、明日への活力を与えてくれる不思議な力が感じられる。それはこけし作りになみなみならぬ情熱を傾けて、いとおしみなから作り続けてきた工人達の努力と、支えてきた地元の人びと、愛好家や研究家たちの支援によるものといえよう。

いで湯を楽しみながら、三カ所のこけしのふる里を旅した。

## 森と湖と温泉の山里が育んだこけし (秋田県 皆瀬村)

江戸時代に各地を歩いて紀行文を書いた菅江真澄は東北地方が特に気に入ったが、中でも大噴湯がある小安温泉郷、木地山泥湯温泉、大湯温泉、川原毛地獄を巡り、皆瀬村辺りを「靈験の地、山や水の精が住む怪しいまでの自然郷」と記し、詳しく紹介している。

東は岩手県、南は宮城県に接する秋田県の東南端にあり、栗駒山に源流をもつ皆瀬川が村の中心部を流れて深い渓谷美を作り、その段丘に小安温泉郷がある。地面からぶくぶく源泉が噴き出す泥湯温泉は、その昔近江の国からやってきた木地師達が最初に入山したのであろうと思われる木地山の奥にあり、木地山こけしのふる里でもある。



▲小安温泉郷の眼下を流れる皆瀬川 (手前に大噴湯がある)。

### 愛らしい雪国の少女たちのよう 小安こけし

ブナや広葉樹の美しい森、高原の湖、そして人々の暖かいもてなしとこけしへの慈しみなど、皆瀬には菅江真澄の愛した山里の趣きが今も息吹いていた。

最初に訪ねたのは、小安こけしを作る高橋久宗さん(68)。

栗駒山の豊富な天然木を使って作る小安こけしは、木肌や木目を生かしたシンプルな目一材作り付け。着物模様は梅花、椿、菊で、その顔は少女を思わせる愛らしさとやさしさにあふれている。高橋さんは等身大の大きめなサイズのものを作っており、十数畳ある広々とした座敷の一角に立ち並ぶ少女たちは高橋さん夫妻の分身、孫、子供たちのように見えた。

「小安温泉の湯治客にお土産品としてこけし





◀高橋久宗さんが作る小安こけし。  
少女を思わせる愛らしさが特色。

を作ったのが始まりで、私で四代目になります。そもそも木地師が入ってきてお椀とかお盆などの木製品を盛んにつくるようになったが、明治政府がヨーロッパなど見てきて、子供に木地屋の仕事を教えるばかりではなく、情操を育てるためにちゃんとした玩具を与えないといけないと言ったのが、こけしの製作を促したと言います。子供は遊びを通して大きくなる、これは今の親たちにも言いたいですね」

木地にこだわる高橋さんは、木の博士でもある。けやきは木目は美しいが幹の内側は赤く外側は白地なので使い方が難しい、エンジュは黒っぽく重厚な感じに、白地のイタヤカエデがこけし作りに最も多く使われているとのこと。木は5〜6年寝かせて木地にする。

工場ですくろをする作業を見学させてもらった。機械を使うとはいえ、まろやかな頭、くびれた首筋、太さが微妙に異なる胴体など、



▲ろくろでこけしの木地作りをする高橋さん。



▲工房の一室で絵付け。奥さんも大切な協力者。

すべてが長年の勘で行う仕事。高価な木だけに失敗は許されない。ろくろの機械や刃物は各工房ごとに特注したものを使っている。

描彩には顔料を使うが、メインとなる朱色だけでも何十種もある。「何十年もやっていいますが絵付けは何時も緊張しますね。これでいいと満足することはないんです」

絵付けは奥さんも手伝っているが、愛らしい顔を描くには女性の方が適しているともいう。こけし作りはこの家も奥さんや子供の協力があって成り立っているようだ。

仕上がったこけしはその後天然の白蠟を何度となく塗って艶を出す。この白蠟は雲仙の普賢岳だけに自生する木から採ったもので、たまたま高橋さんが大量に注文して入手したあと爆発があった。工人仲間は外国産で使えるものがないかといまも必死で探しているという。

しかし近頃はこけしの需要は減り、高橋さんの高価な実物大のこけしは一年に一個ということもある。代々伝承してきたこけし作りですが息子夫婦は勤め人になりました。私の代で終わりがもしれません」と言う高橋さん

### こけしのコレクターがいっぱい

温泉地はどこの宿もこけしの愛好家が多く、名作の数々が鑑賞できる。こけしを収集する「我楽多館」は佐藤夕メさんのご主人と娘の故史子さんが収集したこけし約1万点を展示。休館中だが、予約すれば見学可。



は寂しげであった。そういえば前日我が泊まった小安温泉の旅館には高橋さんの作った等身大のこけしが玄関口に立っていて、いらっしやいませと言葉をかけてくれるようであった。ご夫婦の穏やかな仲むつまじい姿はどこか小安こけしに似ている。これからも何とか続けていって欲しいと願わずにはいられない。

小安こけし・高橋工房 皆瀬村羽場  
☎01834(7)5314

▶宿泊した宿「元湯くらぶ」玄関で出迎えてくれた超大の小安こけし。女将佐藤美佐子さんの豪華手作り料理と野天風呂にも大満足。





▶木地山こけしを伝承する小椋宏一さん。父久太郎氏の晩年の作品にはダルマの絵も登場している。下：今夏建立された久太郎翁の慰霊塔。



▼木地山泥湯温泉は通好みの湯治客に人気。



にその偉業を讃えて関係者が慰霊塔を作ったばかりである。「親父が偉大すぎて、それをそのまま伝承していくことは大変ですが、150年の伝統は絶やすわけにはいきません。木地山こけしは分業で作業しており、木地つくりを二名、絵付けを二名でやってきました。私は木地つくりを主に扱って、おこない、絵付けは娘の美江子が四代目のあとを伝承しています。横手に嫁いでいるので不便もありますが、今はそう売れる時代では無くなったので、野良仕事をしながらゆっくり

やっていきたいと思つてるところです」と宏一氏は語る。

深い森の中に建つ家の客間には、先代たちの作品が収集整理されている。90歳を過ぎてからの久太郎のこけしは、こけしというより仏像に近い趣があり、50代に作つた作品が最も木地山こけしらしい素材さと気品、大胆で個性的な筆使いであった。

小椋家の先には美しいブナ林があり、下ると硫黄の匂いに包まれた木地山泥湯温泉。湯治をゆっくり楽しむ人に人気の穴場である。

温泉は木地山高原キャンプ場にも引いてあり夏休みは若者や家族連れで大賑わいするという。地熱発電の研究施設もあり、皆瀬には大地の息吹が溢れていた。

木地山こけし・小椋工房  
☎0183(79)3236

## 深山幽谷が育んだ逸品 木地山こけし

それぞれが一つの様式化した形と模様を持つ伝統こけしのなかで、異彩を放っているのが木地山こけしではなからうか。目に少しおとなっぽい女の喜怒哀楽が感じられ、着物模様は梅花だの前垂れをしていて、絵付け師の個性が発揮されている。

江戸時代に唯一各地の森へ自由に移り住むことを許された木地師は、近江国から信州、会津、鳴子を経て奥深い山里にはいり、木地山こけしを生んだ。

木地師を先祖にする小椋家がこけしを作り続けてきて五代目、いま宏一氏(67)が後継している。木地山こけしは愛好家が好んだこけしの一つで、それは三代目久太郎、四代目久太郎の工人作家としての優れた才覚によるものが大きかったようだ。

家紋の菊の花をアレンジしたり、縁起ダルマを作るなどして、新しいものにも意欲的だった久太郎氏は昨年93歳で他界、一周忌を前

## 工人70人、こけしは温泉街の風物詩

(宮城県 鳴子町)

こけしの系統は、研究家によれば現在10系統に分類されている。

土湯系、弥次郎系、遠刈田系、鳴子系、作並系、蔵王系、肘折系、木地山系、南部系、津軽系の10系統で、それぞれ温泉地とゆかりがある。

よくお目にかかる胸が大きく菱菊模様が華麗で、頭がはめ込み式で回すとキュッキュッと鳴るのが鳴子系。こけしの代表地として、鳴子町にはこけし作りを家業としている人が現在も34軒、約70人おり、町を歩くとこけしを並べた店や作業している工房を沢山見かける。それが鳴子温泉の風物詩にもなっており、華やいだ雰囲気を与えている。

温泉地の中心部で開業している老舗の「岡仁」を訪ねた。

「木地屋として江戸時代に開業したんですが、こけしを作るようになって私で四代目。昔はお椀等を作って、その傍らこけしを土産として温泉客に提供していたようですが、今ではこけしが9割、お椀は1割弱です。先代の頃は東京等で展示会などが多く、こけしは黙っていてもよく売れたのですが、今はここへ来た観光客が買っていく程度になりました」と語るのは岡崎靖男若社長。家業の見習いとしてこけし工人の腕を磨き、若手として組合の仕事等に取り組んできて25年になる。

木地作りは今では電動機械を使うので作業



◀鳴子町中心部にある「岡仁」。ウィンドーの向こうで見習中の若者がコマを制作していた。下は四代目・岡崎端男さん。鳴子こけしを持って。



も楽になったが、鳴子こけしは頭と胴体を別々に作るの、それをはめ込むのに技術がある。機械を回しながらはめ込むのだが、火が出る緊張の一瞬だという。それだけで熟練するのに10年かかるという。

続いて描彩。朱色の菱菊に墨をそえた大胆な絵柄が鳴子こけしの特徴だが、最近では夫婦ペアで購入、一方を墨だけで描色したものを求める人もいる。

「こけしは木地作りから描彩までひとりの職人が仕上げますから、職人の個性と作った時の年齢なども微妙に反映される。親父（三代目仁治氏）の作ったものがやはり人気があるのは、顔のやさしさ、まなざしでしょうか。50年以上、仕事には厳しく、しかし仏のような心で描き続けてきた親父を私はまだ越えられ

れません」

靖男さんは自分が手がけてきた作品を保管していて、それを見せてくれながら「若い時はいいものをつくらうとして、顔に媚や色気が出てしまっているんですね。無心になり伝統を守っていくことの大切さを日々学んでいます」と語る。

靖男さんがもう一つ力を入れているのがコマなどの郷土玩具。飾りの玩具ではなく子供が遊べるもの、実用的にも使えるものを開発している。その中でコマ同士が追い駆けっこをするユニークな玩具、こけしとコマを組み合わせた小物入れなどが若い人にも人気を呼んでいた。

「不況の影響を受けて、温泉もこけし産業も苦境ですが、鳴子町には34の組合員がいて何とが食べている。凄いなと思いますね。組合が委託を受けて運営している（日本こけし館）」



▲四代目が中心になって制作しているこけし、コマ等の玩具。▶日本こけし館の館内。

も今年初めて赤字ですが、皆それほど暗くない。伝統の手仕事を受け継いでいくという誇りと職人気質が支えになっているのでしょう」

鳴子温泉は豊富で多彩な泉質の湯が自慢で、家風呂を持たず共同浴場を利用している住民も多い。取材のあとは、テレビや雑誌等でも紹介している共同浴場を満喫し、丘のうえにある「日本こけし館」を見学した。

高松宮殿下を始めとするこけしの収集家や研究者のコレクション、著名なこけし作家の作品など5万点以上が展示されているほか、絵づけ体験コーナーや現代の工人の作品を展示即売している。こけし世界の奥深さと魅力に衝撃を受けた施設であった。

・「岡仁」鳴子町新屋敷

☎0229(83)4051

文・浅井登美子 写真・小林恵

日本こけし館 鳴子町尿前 ☎0229(83)3600  
(1月16日より2月末まで休館)



▶湯田町は温泉の町。各所に泉質の異なる温泉が沢山あり、湯めぐりラリ―でも有名。



▶湯田町「結ハウス」の前に立つ厄払い人形



巨大な男根が特色の侍の姿をしたワラ人形「厄払い人形」。もともと湯田町白木野地区に江戸時代より伝わる奇習で、毎年正月19日に地区の人たちが稲ワラを持って集まり、巨大な男根をもった身の丈1mほどのワラ人形を作る。これを厄年の男が背負い、その後にはホラ貝を先頭にしたり村人が続き、村はずれの高台の木に、地区の外へ向けて掲げる。その前で人々はお神酒を酌み交わし、一年間の厄除けと家族の健康、豊作を人形に祈願する。

そのユーモラスな人形は、町の観光物産館「結ハウス」の前に数メートルある巨大な図体で立ち、見事な男根を空に突き出している。郷土の伝統民芸品のシンボルとして数年に一度町民が協力して作っているもので、観光客にも人気を呼んでいる。

この人形をミニサイズから等身大(1m)までいろいろ作り、湯田町の土産品として商品

年に高齢者の趣味の会として発足、平成2年に生きがいセンターが開設されてから、本格的に作業に取り組むようになった。

「いまでこそ道路も整備され高速道路も開通して便利になり、温泉の町として有名になりましたが、昔は北上から来て仙人峠を越える難所でした。病気になる人も医者がいない、はやり風邪や疫病でも入ってきたら大変です。厄払い人形は、悪い病が入ってこないようにという願いから生まれたもので、さらに、健康で子宝に恵まれ、家族が繁栄していくようにということから、男根が立派な人形が作られるようになったでしょう」と小原さんはいう。厄払い人形は、隣の沢内村や、遠野地方にもある。

「顔は昔の武士の顔。おっかないほどいいんだ」

頭、顔と胴体を作り、最後に和紙に武士の

## お年寄りが商品化して ふるさとへの活力剤に 厄払い人形

(岩手県湯田町)



化しているのが、白木野新田郷の高齢者たち。農家のお年寄り16人がメンバーとなり、白木野の「高齢者生きがいセンター」で作業を続けている。

代表の小原徳精さん(85)は昔から藁や竹、藁などの民芸品を農閑期に作り続け、町の人や子供たちに指導してきた。小原さんのよびかけで昭和60

顔を書いて仕上げるのが小原さんの仕事。男根作りをするのは高橋源左工門さん(86)。固くきめこまかに編み上げる体力と技のいる仕事であるが「男としてやりがいのある仕事だべ」とっこり。

胴体をつくり、かみしもを着せて勇ましい姿に仕上げていくのは小田島久一さん(80)。よく見ると、肘、膝などは人体と同じように



▲手足部分を整え胴体を作る小田島さん。



▲リーダーの小原さん。

# ヒバの香りを玩具に

## 脇野沢村営木工芸センター (青森県)

下北半島の西海岸に位置し、北限の二ホンザルと会える野猿公苑、絶景美の仏ヶ浦に近接する脇野沢村が、村営の木工芸品センターを開設、新しい郷土特産品づくりをすすめている。

土産品として人気を呼んでいるのが特産のヒバ材を使った十二支の組木。親子のウサギや犬、鶏、夫婦のイノシシ、遊ぶ三匹のサルなど、ユーモラスで、木の香にあふれている。

他にヒバ材の割箸セット、升各種、センヤクなどを材料にした木肌の美しい花器などがある。

木工芸品センターは、村の新しい産業の掘り起こしと若者の定着をめざした村営の作業場。現在若者、主婦ら5名が働いており、最新の加工用機器を導入。若い人や女性の感性を生かした新しい特産品の開発にも力を入れている。

これらヒバ材の十二支組木は、道の駅・リフレッシュユセンター「鶴の里」、脇野沢の物産品の総合販売所「マリンハウス」で販売されている。ここは新鮮な活魚や水産加工品の市場としても人気があり、青森から函館を結ぶ高速旅客船、蟹田町からカーフェリーが運



行しており、海上交通の観光・休憩場になっている。

問い合わせ／脇野沢村役場振興課  
0175(44)2111



▼白木野地区創作グループの皆さん。しめ飾り、みの雪靴等の作品も多数手がける。



ワラを折って組み込み式に作ってあり大変手が込んでいる。

その日参加してくれた女性たちは木村チエ子さん、早川ノブさん、早川トモイさん。作業しやすいようにワラを整え、手と足の指を一本一本編んでいく。人形は10cmから20、30、50、実物大まであるが、10cmのものも五本づつの指を持ち、手間は大きいものと変らないが、販売価格は安い。(600円から)

「家でぶらぶらしているよりここで働いている方がとても楽しいよ。おしゃべりして働きながら、一日1000円になるの。余ったら皆で温泉旅行にいくんです」と女性たち。

作業は朝8時から夕方4時まで。いまは週1、2回参集しているが、新田郷創作グループが多忙になるのは稲刈が終わった10月頃から。首都の生協や県内の農協等から注文を受けて正月用のしめ飾りを数千個作らなければならないからだ。特別に耕作している実りの

前に摘む青いワラ等を使って丁寧に編み上げたしめ飾りは素朴さと気品に満ち、「いい正月を迎えられた」と礼状が寄せられる。

他に、雪の暮らしに欠かせなかった雪靴、蓑、草履等も暇を見ては作って、物産館に出したり、子供たちの教材に提供している。観光協会の依頼で、観光客にワラ細工を体験させるツアーも引き受けており、白木野のお年寄りには生涯現役、多忙で活気に溢れている。

文／浅井登美子 写真／小林 恵



▲男根作りをする高橋さん

# の宝庫 佐渡島

(新潟県佐渡郡)



▲村祭に登場する手作りの鬼面を持って、本間さん。

4月に入ると、佐渡の島内は鬼太鼓の祭りや能楽の上演会などが各地ではじまり本格的な春を迎える。その年の豊作を祈願する鬼太鼓（おんどこ）は70とも80ともいわれ、集落の神社に奉納したあと、各家を門付けして回る。佐渡へ流された世阿弥にもたらされたという能楽は、佐渡観世流として本間家や弟子、地域の人々に伝承され、毎年春秋には10数カ所の神社等で「薪能」が上演される。佐渡には33の本格的な能舞台がある全国でも貴重な郷土芸能の里なのである。

さらに、佐渡といえはトキの棲む島。中国から若いペアがプレゼントされ、念願の雛が誕生した。何時の日かふたたびトキが田畑や森で戯れる自然郷にしたいと多くの島民が願っている。

流人や都人にもたらされた貴族文化、金山の発展とともに江戸からきた武家文化、そして船貿易の繁盛による町民文化。佐渡はこれらを融合して独自の文化が育まれた。郷土玩具や民芸品にもそんな歴史や風土が反映されている。

## 鬼の面たちに迎えられて

十数年前佐渡島を尋ねた時は「佐渡おけさ」の曲に迎えられて両津港でフェリーを降りると、行商や土産店、旅館の人達が賑やかに迎えてくれたが、いまは新潟港からジェットfoilで一時間、朝早く東京を出ると昼には佐渡へ着いてしまう。フェリーの発着所は近代的なビルになり、「トキ」二誕生を祝う看板が目につく。

整備されてすっかり明るく美しくなった町並みに少々戸惑っていると、鬼の面などをいっぱい並べている店が目についた。

店頭で睨みを効かせているのは赤鬼、青鬼、般若の面たち。木を荒々しく削った大きなもので、魔除として家の入口などに置くのだという。店内に入るところせましく小面（可憐な女性の面）などの能楽に登場する面やトキの木工品、仏像などが並び、骨董品店のよう。奥で木彫の作業をしているのは浅井龍蔵さん（70歳）。元は船大工だったが、造船の仕事が減ったので商売を辞め、趣味で木工の店を開いているとのこと。

「佐渡の観光客は減ってきている上に、団体さんはバスに乗ってすぐ行ってしまうので、店に立ち寄る客は少なくなっただね。でも能楽の里らしく、こんな店があってもいいと思って続けているんです」と浅井さん。

島内の他の工人の作品も取り扱っており、掘り出しものに出会えるかもしれない。



▲両津港近くで面の工房を開く浅井さん。

## 能面作りを生涯の仕事に 本間正春さん（新穂村）

新穂村は佐渡島のなかでは海がなく、佐渡コシヒカリの本場で、トキ保護センターがある。祭りや演能会などの伝統芸能も多く、本間正春さん（71）は能面作りをしている。

母家の脇にある工房で、本間さんは殆ど一日中面づくりをしているそう、壁には一点一点気の遠くなるような時間をかけて作り上げた小面、翁、鬼、般若などの面がかけられ、

▲小面の制作に取り組む本間さん。



# 鬼太鼓と能楽の島は、郷土玩具



▶妖しい魅力を放つ本間さんの作る小面。新穂村で開催された「新能」の舞台。

足元には女人の面たちが並んでいる。

怒りや威嚇などの表情をした般若や鬼面に  
くらべて穏やかな笑みを浮かべた小面や翁の  
面だが、ひとたび能舞台に立つと、悲しみ泣  
き(曇るといふ)、喜び(照らすといふ)、憂い  
嘆くなど、さまざまな表情に変化する。

「午前中と午後では表情が違ふことがあるん  
です。こちらの体調や天気によつても微妙に  
違つてくる。特に女人の面は難しく、目を彫  
る時や色を付けるのに苦労します」

厚さ4寸5分のけやき、ひのき、きり等の  
木をノミで削つていつて形を作る。あらかた  
の形は2日程で出来るが、そのあと細かい彫  
りを重ねサンドペーパー等でみがく。

形が整うと色付けだが、これが大変で、色  
を付けて乾かし、磨いてまた色づけする作業  
を50回繰り返す。絵の具は佐渡・加茂湖のカ  
キの殻をくだいていれた胡粉。透明感のある  
しっとりした独特の色調は、生きている肌の  
ようで、命の鼓動さえ感じさせる。

本間さんは元車の整備会社を経営していた  
が50歳になった頃脳卒中になり、3、4年間

病院に入院した。会社を閉じ、リハビリをか  
ねて始めたのが能面作りだった。

「見よう見まねで本を見たり資料館で実物を  
見て作るうちに、だんだん欲が出て、新潟市  
の能面師のところへも通いました。面にも沢  
山の種類がありますが、形、寸法など決まり  
があります。その中でいかに満足できるもの  
を作れるか、これは生涯のテーマです」

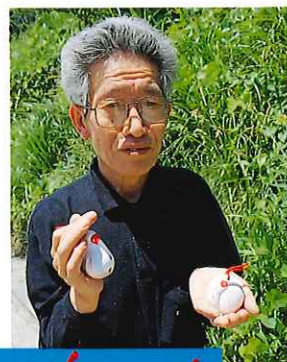
いまも人指し指と親指を除いて麻痺してお  
り、下半身にも後遺症が残る。週2回病院通  
いをしており、家族(奥さんに息子夫婦、孫  
からほどほどにといわれるが、工房に入ると  
夢中になってしまふ。材料の木は、軽くて彫  
るのが柔らかい物がよく、桐や米国産のひの  
きが作りやすいという。

今までに作った面は400個以上。普通は  
注文を受けて作るが、学校の子供たちや祭り  
用に寄贈したものも多い。佐渡の能楽に使う  
面は古くから伝わるもので、傷みも生じてき  
ているが、修理すると価値が下がるそうで、  
そのまま大切に伝承している。新穂村の祭り  
に使う鼻高(天狗)等は本間さんの作品で、  
髪はしゃ馬という中国の馬の毛を取り寄せ  
て、衣装も本間さんが手作りした。

文化庁の伝統芸術文化賞、芸術奨励賞(能  
面部門)ほか昨年は黒川能保存会より感謝  
状を授与されているが、面作りで食べてい  
くのは大変で、東京浅草では45万円する面  
もここでは4、5万円ほど。土産店には置  
いていない。

「一日1000円位にしかならないけど、作業  
している時の緊張感と完成した時の充実感  
がたまらんですね」  
と静かに語る本間さんは、どことなく仏  
像のように見えた。

## トキの新作[土鈴] に取り組む(両津市) 神蔵武志さん



神蔵さんとトキ土鈴  
(左が新作)

「トキよいつまでも」の思いから、美し  
い音色のトキの土鈴を作ってきた神蔵さ  
んは、中国から新たにトキがやって来る話を  
聞き、新しいデザインを考えました。雛を思いや  
る親鳥のイメージである。試作品も好評で、  
形を作り準備していたのだが、予想より早く  
産卵し、雛は元気に育っている。そんなわけ  
で「早く新作の土鈴を」という注文が取引先  
の店から寄せられたいそがしとなった。

神蔵さんの作るトキは、白地に淡紅色(ト  
キ色)をポイントにしたシンプルで気品のある  
土鈴。その音色は優しく、佐渡の人々のト  
キへの切ない思いが伝わってくるようだ。

土鈴は神社に奉納する品物として生まれ、  
やがて縁起のよい郷土玩具として神社や土産  
店で売られるようになった。土鈴に関心のあ  
った神蔵さんは各地を尋ねて研究し、両津市  
観光協会の理事をしてきたこともあって、佐  
渡のもうひとつの特産にしたいと「朱鷺の土  
鈴工房」を開設した。

両津の旅館街に近い民家の一階が作業場。  
土鈴の材料は石膏。石膏を型に入れて流し、  
上下二つを重ねて乾かして1000度近い釜  
で焼き、色を付ける。鈴は石膏を小さく丸め  
たもので、重ねる時と鈴を入れる時が難しい  
という。一個800円から1000円で、新  
潟の土産や伝統工芸品が一堂に会した「ふる  
さと村」(新潟市)の新名物として人気がある。



▶人気のろま人形 文弥人形。後は民話の人形たち。◀山野草の茂る庭先で。



## 人形芝居や民話をユーモア感覚で「古食庵」葛原正巳さん(羽茂町)

佐渡には、説教人形、のろま人形、文弥人形という江戸時代より伝えられる人形芝居があり、国の重要無形文化財になっている。これらの人形を独自のユーモア感覚と優れた創造力、遊び心で玩具、民芸品として作っているのが「古食庵」の葛原さん。

大崎地区の旧家で、百年前の葺葺の家をそっくり作業場兼談話・展示室にしている。数々の人形がユーモラスな表情やポーズで迎えてくれて、まるで民話の世界に入り込んだような雰囲気だ。

代表的な作品は、文弥人形、のろま人形だが、近松文学を美男女の人形が演じる芝居と異なり、この地方に伝わる民話や島人の表情をイメージした葛原流の人形たち。自家の田圃でとれた藁に刺して、玩具・民芸品としてコンパクトに纏め上げている。

「佐渡には獅子舞、春駒、ユーモラスな踊りが笑いを誘う「つぶろさし」とか「ちとちんとん」といった祭りがいまも熱心に伝承されています。民話にもお人良しで失敗ばかりする農民や漁師が登場し、笑い話風に語り継がれている。本当は流人、金山など暗い歴史が多いんですが、それを踊りや笑い話で紛らわせた。そんな風土を子供やよその人達にも伝えたいと思って作り始めたんです」

きのすけ、ぶっし(仏師)、おはな、てんくろうべい、つり吉等、葛原さんが生み出した人形は数限りない。信楽と地元土を使っ一つひとつ練り上げ、それを1200度で焼いて色付けする。ドイツから取り寄せた絵の具は発色がよく土人形に合うことだが、色使いのうまさ生き生きとした表情は、葛原さんの天性のものかもしれない。

「作り手が作りとって作っているんです。そのほうが気に入ったものが出来ませんが、次々新しいものを作りたくなってしまい、同じ物を量産するのは苦手なんです」という。

家の天井で百年間いぶされてきた竹で作った「智恵の輪」がある。これを東京渋谷のNHK通りの玩具市に出したところ、たちまち人だかりが出来、おじさんたちが夢中になったという。

「昔の人々の生み出した玩具や民芸品には素晴らしいものがあるのに、いまの子供たちはテレビゲームでしか遊びを知らない。触ったり使い込むほど、愛着のわく玩具がいろいろある。古き良き伝統玩具をもっと紹介していきたいと思っています」

葛原さんはよく講演会や講師を頼まれて各地へ出掛ける。そんな



▲いろいろ、神棚、古民具、何でも揃っている古食庵の工房。人形に民族楽器を聴かせる葛原さん。

家のまわりには、もう一つの趣味である山野草がところ狭しと茂り、それを生ける粋な鉢や盆も葛原さんの手作り品だった。田や畑仕事は農繁期を除いて母親と奥さんまかせで主人は悠々自適な趣味の暮らし(?)。だからこそ魅力ある玩具が生まれるのかなと思いつつ、森のなかの民話の家を後にした。



### 新穂村・熊野神社の「新能」

武井地区は古くから能楽が盛んで、神社には本格的な能舞台がある。午後4時から前座として佐渡高校男子生徒らの「仕舞」が演じられ、午後7時半、火入式のあと本間村長の挨拶のあと新能がはじまった。演目は「船弁慶」。面の持つ不思議な魅力に魅せられながら新能を堪能した。

本間能面工房/新穂村舟下 ☎0259(22)2839

「古食庵」羽茂町大崎 ☎0259(88)3096

朱鷺工房/両津市福浦 ☎0259(7)5467

文/浅井登美子 写真/小林 恵



# 土佐っ子の夢を大空高く 土佐凧、フラフ、のぼり

絵師・染色家 吉川登志之さん（高知県香我美町）



高知県で戦国時代より用いられた土佐凧、子供の健康や豊作を祝って五月の空にはためくのぼり、フラフ。これらの絵師、染色師として代々伝統を守り続けてきた吉川家。四代目は「現代の名工」に選定される作家だが、大空を駆ける土佐っ子魂が失われていけないことを師匠は最も願いつつ、今日も筆を取っている。



▲吉川家の玄関に飾ってあった、土佐凧のタペストリー。  
▶フラフ作品。上は金太郎鯉抱き。下は義経八艘飛び。



## 日本一高く上がる土佐凧

正方形の角を立てた形をし、力強い黒線と魔除けの赤を基調にした華麗な絵柄の土佐凧。正月から旧正月にかけて、土佐では凧あげ大会が開かれ、大人も子供も参加して夢中で楽しむ。

特に大凧あげは、紋章や慶祝文字、武者、鶴などを多彩奔放に描いた大小無数の凧が、親凧につるした竹籠の「ふさ」の火口が燃える時流れ出るジャアラ（テープ）をうばいあってむらがるという豪快な伝統的行事で、マニアが各地から集まる。

凧は古代中国で兵器や宗教的な占いのために作り出されたもので、平安時代に日本に伝えられた。土佐では戦国時代に秦氏が四国平

定のために「空飛ぶ兵器」として用い、敵陣距離の測定、矢のとどかぬ場所への放火、唸りにより相手方を威嚇し、心理作戦等に活用したという。

江戸時代に入ると、男子出産を祝う主要行事になり、また還暦の祝いに凧あげをする風習も土佐にはある。

正方形角立て凧は、シンプルな形だけにバランスよく作るのに神経を使うが、飛翔力は日本一、500mの糸を使い切ることもあるという。そんな時は、凧の姿は大空の彼方へ消え、点としてしか見えない。

その土佐凧づくりの伝統を二百年余、家業として守り伝えてきたのが吉川家で、四代目吉川登志之さん（73）は、現在ただひとりの制作者として「現代の名工」に選ばれている。

特製の手漉き和紙を吟味し、三年間寝かせたあと、泥絵具で一筆一刷、毛をゆるがせずにダイナミックに手描きする。大きいものは畳二、三畳分、平均すると縦100cm×横180cmのものが多く、最近は大タペストリー



一筆一刷、一気に筆を運ぶ吉川さん。



土佐風の絵付け作業は奥さんも手伝って。  
左下/注文の神社ののぼり制作(染色工場)



(壁掛け)として人気を呼んでいる。金太郎、武者、おきあがり(姫だるま)、鶴等の朱色が鮮やかな絵柄で、土佐っ子たちの大空への夢をおおらかに表現した吉川名人の手描き作品は室内の装飾品としてもよく似合う。

## 五月の空へ、健康と豊作を祈願して Furo, Shiro

フラフは、オランダ語の「旗」が訛ったもので高知市から東の海岸地方で、男子誕生を祝う端午の節句に、鯉のぼりや幟と共に空高くあげられる。稲の二期作がはじまった明治の終わり頃から、天候の不順な農繁期のなかで、取り扱いを簡便にと工夫された風習が、いつか広まり伝統となったという。

フラフは大中小の三つの大きさがあり、四角の巾という大サイズでは縦4m、横7m、小サイズの二巾でも縦2m、横3mある。その中

に、金太郎鯉抱き、那須与市、義経八艘飛び、金太郎熊乗り等の時代絵巻が、海の鮮やかな青色や朱色、緑色などを使って緻密に描かれる。

一方、のぼりは、細長い布の上部と横の一方に乳をつけて竿を通し、立てて標識とするものをいい、戦陣や社寺、船首などに用いられてきた。男子の誕生を祝って端午の節句に立てるものは五月幟というが、全国的には高価で立てる手間もいることからその数は激減している。しかし高知県では、のぼりとフラフをあげて祝う習慣が今も残っており、南国土佐の初夏の風物詩になっている。

のぼりの大きさは、大が縦11m、小が9mで横は約90m。吉川さんの描く伝統的のぼりには、フラフと同様に金太郎、那須与市、川中島、神功皇后等の絵が大胆かつ精密に描かれ、節句のあとは各家が大切に保管している。

## 「絵金」を継承して現代へ

染色工芸を代々伝承してきた吉川工房では先代の故半蔵翁によってフラフの製作が始められたという。半蔵は京へ出て四條派の画家として大成する一方で、幕末の頃土佐へ放浪してきた絵師「絵金」の絵に惚れ込み、創意工夫を加えて、現在の画風を完成した。

絵金は文化9年に高知城下に生まれ、江戸へ出て狩野派絵師となるが、贋作事件を起こして破門、放浪の後高知へ戻り、町絵師として風俗画などを多数描いた。

蠟燭の炎にぼうっと浮かぶ泥絵具、血の海に沈む女、転がる首、幽鬼——土佐の夏祭りには絵金の芝居絵が夜の参道を妖しく彩る。(現在、赤岡町で「絵金まつり」開催)

この絵金の弟子だったのが初代吉川金太郎

建立160年の古い家を改装してオープンした「絵金資料館」



で、吉川家には絵金の白描を中心とする作品が多数保存してあることから、自宅の一部を改装して「絵金資料館」をオープンした。

古い日本家屋を生かした展示室には、半蔵翁が生涯をかけて集めた300点余が展示されている。入場料は無料。

## 「私は努力の人」

フラフ、のぼりの製作は、特注の木綿地にまず唐紅の下画を米糊で筒描きする。そして一刷毛ずつ色彩をぬり染めていき、最後に誂え主の家紋またはノシを鮮やかに染め抜く。11mもあるのぼりを広げるために工房は体育館並みの広さを持ち、土佐風を描く和室も何十畳もある。家自体も160年の歴史を持つ貴重な建物だ。

今では「名工」といわれる四代目登志之氏としゆきだが、「23歳の時母が亡くなって実家へ帰り、家業を手伝いはじめましたが、40歳間もない頃父が亡くなりました。父も祖父もすぐれた

世界のおもちゃが、こんにちは!

# 「ちゃちゃワールド」(北海道生田原町)

北海道のオホーツク圏はわが国唯一の流水地帯で、その沿岸や内陸の変化に富んだ風景は四季折々に厳しくも美しい表情を見せてくれる。その中央部にある生田原町では、森と親しみ木を使って玩具を作る習慣が町民の生活に根付いていたことから、昭和62年に有志の手で、「木のおもちゃ王国」が建国され、平成4年に誰でも自由に木の玩具作りが楽しめる工房「ピノキオハウス」が完成した。

さらに、木の玩具を通して世界と交流しようとして、平成10年に世界の木製玩具1万点を集めた「ちゃちゃワールド」を開設した。その玩具探しが縁でフランスのモアラン・アン・モンターニュ町との姉妹都市提携が結ばれ、木の玩具を通じた個性的な町づくりが進められている。



館内には実際に人形にさわって遊べるコーナー、玩具作りを体験できる工房、遊びの広場、レストラン、売店等がある。

さらに、北海道に古くから伝わる「口ポックル」30作品、「銀河鉄道の夜」で知られる藤城清治氏の影絵作品等を展示する「口ポックル美術館」を併設している。

・ちゃちゃワールド 紋別郡生田原町生田原  
☎01584(9)4022



▲高知県立美術館で開催の吉川登志之さん作品展。絵金資料館で白描について説明する殺さん。

えてくれるエントランスホールを通ると、1階フロアーには世界40カ国からやってきた木の玩具が展示されている。あやつり人形、くるみ割り人形、からくり玩具など、童話の世界に來たようだ。

絵師でしたので、私は常にそれが頭にあって気に入ったものが描けない。当初は半分くらい捨てましたね。親父は才能の人、私は努力の人です。今でも親を越せないと思いつつ努力しています」

一つ一つ仕上げていく仕事だけに根気と情熱が必要。最近では長男の殺氏(38)が五代目として家業を手伝ってくれるので、絵付け等に専念できるようになった。

ここ香我美町には大漁旗等の染色を家業とする家がまだ数軒ある。需要が減ったため経営は厳しいが、何とかこの伝統工芸を残していきたい、また凧あげを楽しむ風習が子供達

の遊びの中に伝承されていってほしいと、吉川さんは切望している。氏の作品は海外でも評判だが、「私達の仕事は生活や風習の中に取り入れられてこそ生きてくるし、やり甲斐もあります。なぜ凧をあげるのか。幟を立てるのか、その辺のことをしっかり伝えていきたいと思いません」

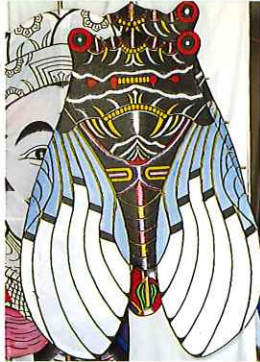
と語っていた。

・吉川工房 香我美町岸本 ☎08875(4)2528 高知県立美術館ミュージアムショップでも一部作品を展示販売している。  
取材・撮影/相原 宏

# 壱岐は鬼伝説の島、風の島 [壱州鬼凧]300年の伝統を守る

工芸士 土肥茂一さん(長崎県壱岐勝本町)

▼鬼凧。幽グキを見せ過ぎないのが土肥さんのこだわり。蟬凧。空へ揚げると透明感が出て美しい。



玄界灘に浮かぶ壱岐の島は、その昔「鬼ヶ島」と呼ばれた鬼伝説の島。度重なる異賊の襲来を受けていた島の人たちにとって、残忍な賊の襲来が鬼のように思えたのであろう。鬼を退治した武将の功績をたたえ、絵柄にして揚げたのが壱州鬼凧の始まりだ。以来、島の暮らしとともに生き続け、今日まで300年の歴史を誇っている。1993年に、長崎県の伝統工芸品に指定された。

壱岐には鬼に関係する伝説や行事が数多く残っている。

「百合若大臣の話」もその一つ。都から壱岐の島に鬼退治にやって来た若武者、百合若大臣が鬼の首領の首をはねた。するとその首は空高く舞い上がって落下し、百合若大臣の兜にかみついて息絶えたという。以来、壱岐の

人々は鬼が天から降りてこないようにと鬼凧を揚げるようになったという。鬼凧はこの伝説をモチーフにしたもの。凛々しい若武者の兜にかみついた赤鬼という独特の図柄である。

## 郷土の伝統を絶やしたくない

20坪ほどの工房に、色鮮やかな大小のさまざまな凧がずらりと下がっている。一角には過去に贈られた数々の賞状やトロフィーが所狭しと並ぶ。ここは壱州鬼凧制作の第一人者・土肥茂一(87)さんの仕事場。

和紙の上を一本の筆が走り、鬼と若武者が巧みに描かれていく。丁寧な手仕事、丹念な筆運び。故郷の伝統を守り、明日へと継承するために、土肥さんは技を駆使して、壱州鬼凧を守っている。

土肥さんは、十代目に当たり、元々は宮大工。10歳の頃、祖父から初めて凧作りの手ほどきを受け、大工仕事のかたわら趣味として凧作りを続けてきた。凧作りに専念するようになったのは、20数年前、テレビで全国に紹介され、凧の注文が殺到したのがきっかけ。その時、「郷土の伝統を絶やしてはならない。趣味ではなく本職に」と決意したという。以来、凧作り一本に精魂を傾けてきた。

## 土肥玄州作「壱州鬼凧」

土肥さんの凧は「土肥玄州作」として名高く、大胆な色づかいと太い描線の力強さが特徴。それとは対照的に、髭や髪の毛の精緻な筆運びも土肥さんならではのものだ。髭一つで人物が生きたか死ぬかが決まるといふ。息を詰めながら大胆な線や繊細な線がみえるうちに描き出される。

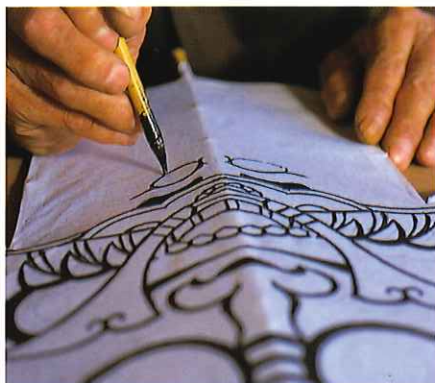
絵の具は京染め用の天然塗料を使用。色は

墨、赤、黄、紫、緑など八種類。天然塗料を使うと、凧を揚げた時に空の明るさが透けて見え美しい発色を見せるという。

また、骨組みにも土肥さん独特の工夫が凝らされている。あらかじめ頭の部分を長めにするので、凧が上下するだけでなく、左右にも動くようにしているのだ。

勝本町では鬼凧のことを「ヨウキウ」と呼ぶが、それは「揚弓」から来ているのではないかと言われる。骨組みが弓なりになった部分が何か所もあり、また背負わせる「シユミセン(フグの皮で作った唸り)」を弓状に張

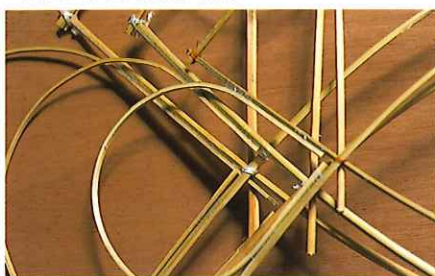




▲息をつめて筆が運ばれる。



◀各種の筆を使って天然塗料で描く。



▲竹ヒゴをしっかりと組んだ風の骨組み。



▲ミュウセン(唸り)用のフグの皮。現在はビニール紐で代用することも多くなった。



▲風作り教室用の下絵の板木。中高年の参加が多い。

るからだろうと言う説もある。その「唸り」が風が上下左右に動くことでより大きく唸るようになる。

### 気分転換は釣りとパチンコ

「気分がすぐれない時は、それがすぐに絵に表れる。そんな時は釣りやパチンコで気分転換するんですよ。」

風作りは全て手作業のため、小物(40cm)でも一日一枚、大物(2m)になると一週間程度かかる。

風作りの工程は次の通り。

- ①竹割り(荒削り) ②ヒゴ作り(竹割りした竹で、風の大きさに合わせてヒゴを作る) ③骨組み(ヒゴを組み合わせ糸で結ぶ) ④紙張り(骨組みに合わせ和紙を張り込む) ⑤下絵付け(墨で下絵を描く) ⑥仕上げ絵付け(色絵付け) ⑦ね糸付け(糸を取り付ける) ⑧うなり弓付け(弓を付ける)

「自分が満足いく作品は百枚に一枚あるかないかですね。自分でも納得いく風ができた時は、手放すのが惜しくなる。娘を嫁にやるよ

うな気持ちですよ。」

### 全国が「ふん」だー!

土肥さんは鬼風以外にも、昔からあった金時風や蟬風、お祝い用の七福神風なども作っている。今は揚げるためのものより、室内インテリアや家内安全・無病息災の魔よけ用としての需要が多くなっている。全国の風ファンは勿論、時には海外からの注文もあるとか。また、全国各地にある風の博物館からの寄贈依頼も無い込む。

「装飾用もいいけれど、やっぱり揚げてこそ風。昔のように桃の節句にご馳走作って、家族みんなで風揚げを楽しむようになればいいんですがね。」

その言葉には、まだ鬼風揚げが盛んに行われていた土肥さんの小さい頃の情景がよみがえり、それを懐かしむような響きがあった。

壱岐地方では、かつては旧暦の三月三日の「桃の節句」に子供の無事な成長を願って家族で風揚げ(風とぼし)を楽しんだ。玄界灘の太空にたくさん鬼風が飛び交い、眼を怒らせ、尻尾を振って、唸り合う光景は壮観だ



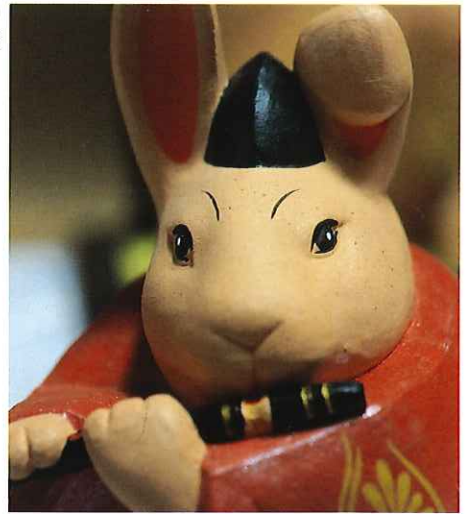
ったという。現在、勝本町では五月五日の子供の日に鬼風揚げ大会が催されている。

ところで、「百合若大臣の話」には、まだ続きがある。鬼が天から降りてこないようにと鬼風を揚げるようになったが、何時の頃からか「枯木に花が咲いた時と、炒り豆に芽が出た時には降りてこい」と言われるようになった。それは、島の人たちが憎い鬼を許し、交流を持つと考えたからではないだろうか。武者の兜にかみついた赤鬼、この独特の図柄がどこことなくユーモラスに見えるのは、そうした大らかな優しさのせいなのかも知れない。壱岐は鬼伝説の島、風の島である。

土肥工房 壱岐勝本町  
☎ 09204(2)0224

文・写真/武田栄一

現在制作中の「干支(えと)シリーズ」。それぞれに雅楽の楽器を持たせる構想で、現在4作が完成している。



▼雛人形シリーズを制作する倉富さん。

# 肥前の民話を土人形に込めて 人形師 倉富博美さん(佐賀県多久市)



皇の軍勢が進駐してきた時、服従を拒んだ八十女は軍船の焼き討ちを企てるが、それを知ったある男が企てを密告してしまう。それで八十女達は敗れ捕らえられる。八十女は号泣し「妄等一点の罪もなし、何が故に高天原の人々は我をば殺し給うぞ」と叫んで斬られる。しかし、血は一滴も出さず、八十女は雪の固まりになって解けてしまったという。

## 博多の人形師を経て郷土へ

「私はこの話が好きなんですよ。」

人形師・倉富博美(47)さんは、一度は飛び出した郷土に伝わる民話について話し始めた。「政治の都合で元から住んでいただけの罪もない人々を服従させようとする。それに抵抗した八十女は悪くない。自分たちの場所を守ろうとただけなんですよね。だけど、最後はむごい死に方をさせられる。民話では、そのむごさを八十女に赤い血を流させるのではなく、白い雪になって解けたことにしています。これはこの地方の人たちの八十女に対する共感や同情、慰めの気持ちの表れだと思う」

兵を遣わして、掩滅す、因って嬢子山という。この話は肥前地方の民話の中に残り、現在まで語り継がれている。「土蜘蛛」とは九州地方の先住民族の一呼称で、「八十女」はその土着の女酋長の一人。天

んです。肥前の人々の優しい気質の。私は一度ここを離れたので、それがよく解るようになった気がするんですよ。」

倉富さんはこの民話を題材に土人形の制作をはじめた。

倉富さんは高校を卒業し営業マンとして就職した。しかし、何か物足りない。

「自分の将来が何となく決まっているようにいやだったんですよ。長男だったんで家を継がなくてはならないとか。」

二十歳の時、博多で博多人形師に弟子入りし、以後10年を博多で過ごした。その間いくつかの賞を受賞するなど、有望な若手作家にもなっていた。



◀仏像まで並ぶ制作工房で、倉富さん。



◀倉富さんの作品が並び別棟の展示ギャラリー。  
▶雛人形



## 「肥前土人形聖心房」開設

博多人形師として売り出していた倉富さんだったが、もっと自由な制作環境を求めて故郷の多久市に戻り、自宅に工房を開いた。「肥前土人形 聖心房」。倉富さん30歳の再々出発だった。

「初めは全く食えなかったですよ。40万円ですよ、年収が。粘土を買うのにも事欠く感じでした。」

それでも家族の協力もあり、なんとか自由な創作の場が確保できるようになった。

「作りたいものは沢山あったんですけれど、作っても全く売れなかった。」

でも、一生懸命やっていたら何とかなるとは思っていたそうだ。そして、地元で活動している内に多くの人とつながりができるようになった。

「お陰様で」、これは倉富さんの口癖である。自分一人の力は小さい。自分以外の何かが力をくれる、助けてくれる。その

ためにも小さい力なりに自分の努力を惜しまない。高校以来、倉富さんは仏教の教えに興味と畏敬の念を持っている。

やがて口コミで作品が一つま



た一つと売れるようになり、個展がテレビで紹介されるなど、工房も徐々に軌道に乗って来た。

## 制作には一年に及ぶものも

倉富さんは大量生産の人形師ではない。土人形の制作は全て倉富さんの丹念な手作業。一時下請けに出していた工程もあったそうだが、それは倉富さんの目になかなう仕事ではなかった。それ以来すべてが倉富さんの作業となった。

作品の制作は、おおよそ以下のような工程をたどる。

①構想を練る（数カ月〜一年） これが一番の難関となる。時には一年以上の期間を要することもあるとか。

②原型の制作（一週間〜数ヶ月、時には半年〜一年に及ぶものもある）

構想を実際の形にする作業。全体のバランスを考えながら粘土で制作する。全体から細部へと作業を進める。原型が完成したら人形の内部の粘土をくり抜く。そして乾燥させ焼成し原型が出来上がる。

③型取り 原型を型が取れる状態に切り離す（形が複雑でない人形は切り離さない）。原型の周囲を別の粘土で囲み枠を作る。表裏別々に石膏を流して型を取る。それを乾燥（7〜10日間）させ石膏型が完成する。

④生地作業（手押し） 型に5mm程度の厚さで粘土を詰める。表と裏の型に粘土を詰めた後、接合部にドベ（ドロドロの粘土で接着剤になる）を塗る。合わせ目がずれないように細心の注意を払いながら型を合わせる。その後型から生地を取り出し、合わせ目の耳（ドベがはみ出した部分）を削る。切り離れた各部を下でで接合し、生地（人形）の完成となる。



## ⑤生地の乾燥

⑥焼成 生地を窯に入れ初めは弱火で焼く（4〜8時間）。窯が5000度になった時点で強火にし、950〜1000度で焼き上げる（8〜12時間）。

⑦絵付け 人形の表面をサンドペーパーで均一にし、全部で十回前後の塗り重ねをする（この時三段階の濃さの絵の具を使用する）。そして完成となる。

⑧完成 完成後は包装・箱詰めをし、各地へ発送となる（卸屋・小売り・個人など）。基本的に倉富さんの作品は受注生産なので、納期は半年から一年後になることが多い。

## 「伝統」とは、人々が育んできた思い

「私は息子にこの仕事を継がそうとは思いませんね。息子は息子で好きな道に進めばいいと思っています。私自身がそうでした。この工房は私だけで閉めてもかまわない。でも、必ず若い誰かが肥前土人形の伝統を受け継いでくれるでしょう。今までもそうして来たし、これからもそれは変わらないと思うんです。」

「伝統」とは何だろう。

それは長い時間の流れの中で、育まれて培われて来た人々の思いの総体のように思えた。「聖心房」倉富博美さん（多久市）

☎0952(75)6432

文・写真／武田栄一

# 無形文化財を形にする

——竹人形師 佐岡保さん(徳島県山城町)

徳島県の無形文化財に指定されている「鉦おどり」や、全国に知られる「阿波おどり」。それらが見事な竹細工で表現されたのが、三好郡山城町の竹人形師佐岡保さん(79)の作る竹人形だ。

地元の観光土産として人気を呼んできたこの人形に、愛着を寄せる人は多く、県の伝統工芸品にも指定されている。山城町商工会は郷土の民芸品として伝承していこうと、平成8年から後継者育成のための講習会をスタートさせた。

## 素材は近隣の五三竹で

竹の枝や筋を生かした高さ5cmほどの人形が、かねを打ち、太鼓を叩いて踊る佐岡さんの竹人形「鉦おどり」は、今にも動き出しそうな躍動感に溢れている。10体ほどの人形はかね、太鼓、棒振り、鬼などで、鉦おどりの様を見事に再現した竹細工だ。

200年も続いているというこの伝統の踊りは、地元の無形文化財にも指定されている貴重なもの。住人の無事安泰を祈り、仏様の供養をするため、毎年奉納される盆行事の一つとされている。

佐岡さんはこの伝統の踊りを少しでも多くの人に知ってもらおうと、自ら題材に「鉦おどり」を選び、製作した。

佐岡さんの作る竹人形は他にも「阿波おどり10人連」や「明石海峡大橋」など、地元の行事や名所に題材をとったものが多い。使う



上/鉦おどり 下/阿波おどり

素材は近隣でとれる五三竹という小ぶりの竹。直射日光のあたらない青い竹が、素材としては最も適しているという。

平成10年春の明石海峡大橋の開通は、佐岡さんの製作欲を大いに刺激した。以前に作った「瀬戸大橋」に比べ、「明石海峡大橋」は主塔の高さが10cmと高く、それだけ手間のかかる作業だったが、難しければ難しいほどやる気が湧いてくるのだという。

橋をバックに佐岡さんは阿波おどり人形30体を踊らせた「30人連」を組み合わせた。提灯を持って踊る人、三味線、笛、かね、太鼓を演奏する人。高さ3cmにも満たない人形たちと、10cmもある橋の主塔との対比が面白く迫力のある作品となった。

竹人形は小さいが大変精巧に出来ている。人物の胴体の部分に竹の節を使い、顔や手足

完成した竹人形を手に佐岡さん



▶自宅(佐達)集落からは眼下に吉野川・四国大歩危の渓谷と町を望む。  
▼自宅で神経を集中して制作に励む佐岡さん。



▲独自に開発した用具(キリ、ナイフ)

は竹筒の中に組み込ませる複雑な作り方。最後に、ケースの背景に描く書も佐岡さんの自筆によるもので、その多才ぶりに驚かされる。

## 伝承のための講習会も復活

佐岡さんの竹人形師としてのスタートは50歳の時。それまではお茶や葉たばこの栽培農家だったが、農業の副業にと町の商工会の勧めで、竹人形づくりの講習を受けたことがこの道に入るキッカケとなった。

当時50人位が講習を受け、何とか仕事として成り立つまでになったのが、そのうちの20人位。竹人形は細かい作業で、根気のある仕



竹人形講習会。蔭山さんは弟子の一人で指導員もする(下)



事だったが、地元の民芸品として土産物屋などに納めると、実によく売れたという。作ったものは全部が商品として捌け、「農業よりもずっと効率がいい位だった」と、佐岡さんは当時を振り返る。

しかし昭和47年のオイルショックの頃から売れ行きも伸びなくなり、作り手の数は減る一方となった。現在では佐岡さんを含め、町内に残る竹人形師はたった二人となってしまった。

そこで山城町商工会が中心となり、町の伝統民芸品の後継者を育てようと、昭和61年以降休止していた竹人形講習会を復活させた。講師として指導にあたる佐岡さんは、

「昔の親方は『技は盗んで覚えろ』と言ったぐらいで、弟子には技術を教えなかつたものですが、私はこの町の素晴らしい伝統を一人でも多くの人に受け継いでほしいと思うので、技術はどんどん伝授したいんです」

と、受講生の成長を嬉しそうに見守る。現在佐岡さんのもとには二人のお弟子さん

が育っている。20歳の蔭山泰輝さんと山城町に移住してきた久保田忠さんという50代の男性だ。20歳の蔭山さんは竹人形の本を通じて佐岡さんと知り合い、その後週一、二回の指導を受けるようになった。

「最初は遊び感覚で始めたんですけど、だんだん本気になってきて、手の表情とか体の動きとかで変化が出せるし、面白い仕事だと思っています。佐岡さんの作品を見ると、もうこの人についていくしかないと思わせるものがあるんです」

と、若い蔭山さんは意欲的だ。

佐岡さんの作る竹人形はすべてが手づくり。手一本、脚一本にも魂がこもっている。「温かい温もりが伝わってほしい」と、生涯現役で佐岡さんは今日も作業台に向かう。

・問い合わせ/山城町民芸品製造販売組合

☎0883(86)1059

取材・撮影/相原 宏



▶ 鹿児島県内に伝わる土人形。昔のものを集めて型枠を作り復活に当たっている。

# 大隈半島の素朴な土人形 垂水人形の復活 中島三郎さん

(鹿児島県垂水市)

姿を消してしまっただ  
鹿児島六大土人形

鬱蒼として、風流な庭を抜けて、「工房人形創遊」の玄関を入るとすぐ右手に垂水人形の展示場がある。薩摩古武士、鳥籠を持つ女、金時、鯛乗り童子、饅頭喰いなど、明るく朗らかな色合いで、物語性の強い土人形だ。

鹿児島県の土人形は、帖佐、垂水、向花、日本山、宮之城、東郷の六大人形と言われ、始良町の帖佐がその始まりである。慶長の役(1597年)で出兵した際、島津義弘が伴い帰った朝鮮の陶工が、帖佐村で土偶を造ったのが、薩摩藩に広まったと言われている。鹿児島県六大人形のうち、現存している土人形は帖佐と垂水だけ。しかし、帖佐人形も現在制作を休止しているの、実質的に鹿児島県で土人形を造っているのは、中島三郎さん(75)一人だけとなった。

戦後から途絶えていた垂水人形を、平成元年に復活させようとした時、垂水市の郷土史家中島信夫さん(73)は、「郷土の伝統を途切れさせるな。おはんが居らんなら、なつちやこんが(貴方が居ないならば、成し遂げること

はできない」と、中島三郎さんを口説いた。小学校校長を退職し、垂水市の文化財保護審議委員を努めながら、ステンドグラスを作っていた三郎さんには、うってつけの役だったのだ。他に仲間を募って5人で「垂水人形研究会」を始め、三郎さんは工房を開いた。しかし、結局残ったのは2人だけ。現在は千支まで入れると、120種の人形を造っている。

## 市民の協力を得て 古い人形の型枠作り

いざ垂水人形を復活させようとしても、人形の型枠は一つも残っていない。そこで、百種以上も型枠が残っていて、一足早く復活した帖佐人形を研究していると、市民が昔の

垂水人形を「参考にして下さい」と、持ってきてくれたのである。割れかけたものや、煤けたものもあつたが、それらを貸してもらっては参考にし、型枠を作ることから始めた。

型枠作りは、まず人形の原型を粘土で作り、柔らかいうちに釣り用のテグスで前後二つに割る。次に、割った粘土の原型をガラス板に切口を下にして置き、木枠で囲む。そこへ石膏を流し込んで、一晩寝かせて固めると、型枠の出来上がりだ。型枠が出来ると、まだ柔らかい原型は摘みだして壊してしまう。

さて、型枠が出来てしまえば、後は幾つでも複製が可能だ。次は、色付けである。色付けは、一つ一つ



▶ 薩摩古武士の垂水人形



▶ 桃の節句用の女性像



◀人気の「招き猫」を制作する中島さん。目を入れる時はいつも緊張する（下左）。下右/貴重な型枠はきちんと整理して保存。

筆で塗っていく。ここに垂水人形の特徴が表れる。ミエ子夫人（73）が、下色付けをして、仕上げ塗りは三郎さんがする。一番難しいのが、目入れである。「目で、人形が生きるか、死ぬかですから。体調の一番いい時に、目入れはします。目の入れ方で表情が違ってきますから、脇で話しかけたりすれば、怒りとはしますよ」

三郎さんは、目入れの時、手が震えるのを避けるため、その日は他に仕事をしない。「子供の目が一番難しいですね。仕上がりが一体一体異なり、印鑑を押すようにはいかないが、又、そこに面白みがある訳ですよ」復活で最も苦労したのが、絵の具である。残っている大正初期の垂水人形は、ほとんど色が残っていない状態で、下地に胡粉、上塗りは泥絵の具が使ってた。同じ物を使えば、同じ結果になる。

画材店で薦めてくれた絵の具を使ったところ、三、四カ月で色が剥げ落ち、信用を落としてしまったこともある。暗中模索を続けて、現在のアクリル系の絵の具に行き着いた。

### 「市民人形講座」も年々盛況

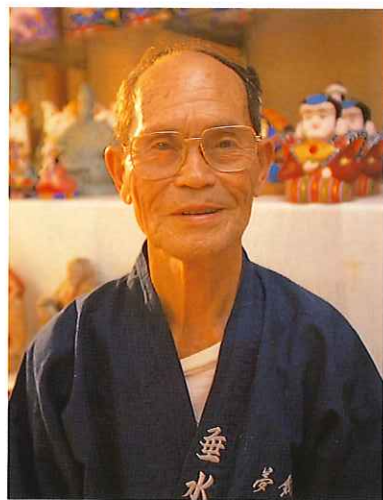
垂水人形を復活させようとした時、ただ再現するのではなく、創作を市民に親しんでもらうことを目標とした。そもそも垂水人形は、農閑期の副業として、素人が造っていたものである。特殊な技法は必要としなかった。平成2年4月から、市民人形講座を20人の受講生で始めた。現在では市外からの受講生

も含めて34人になっている。毎月一回の講座では時間が足りないなので、自宅の工房を無料解放するほどだ。

工房人形創遊に展示してある垂水人形を見ると、素朴さとほんのりとしたユーモアを感じる。これらの人形は、桃と端午の節句に飾られ、子供の健全な成長と幸福を願って造られていた。「薩摩古武士」が代表の型となっているのもうなずける。

しかし、中島三郎さんは「細々と模様を入れすぎて、素朴さを失いつつあるのではないかと、反省している。確かに、「俵持ち男」などの小さな人形を見つめてみると、元気な男の子を題材にしながら、単純な色付けによる素朴さと、何とも情けなさそうな眉の表情に限りない親しみを覚える。そこに垂水人形の持ち味があるようだ。美術品にはなっていないと思う。

温暖な気候の大隈半島に脈々と受け継がれてきた垂水人形は、薩摩古武士の志を持ちながらも、純朴な地元の心情が滲んでいるのだ。垂水人形に込めて受け継いできた薩摩半人の精神は、市民人形講座を通じて地元根付き、もう絶えることはないだろう。

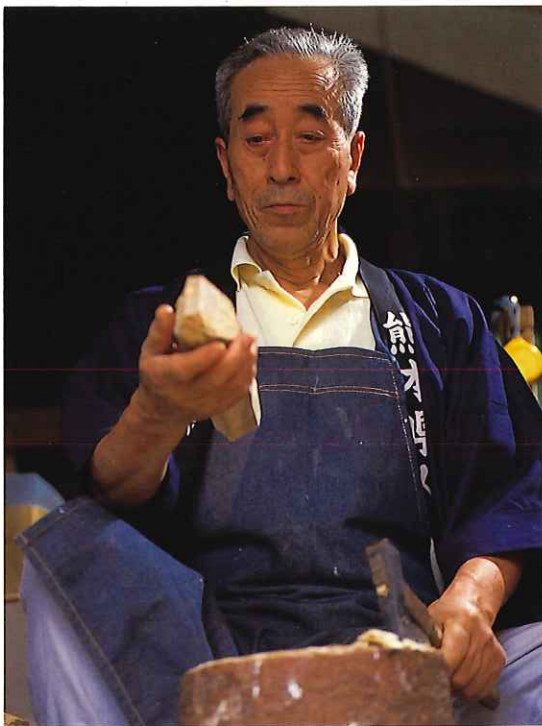


「工房人形創遊」の中島三郎さん。  
垂水市本城 ☎0994(32)4088

# 山里の落人伝説を工人達が継承

## 「きじ馬」「花手箱」

(熊本県人吉市他)



◀箱の中から三つ、三つと小さい箱が出てくる「花手箱」  
▲▲鉋で荒削りしてカンナで形を整える住岡さん。



ほどが山の仕事が終わる秋口から作り始めて、春の市には、戸板にきじ馬と花手箱を並べて商っていた。「親が貧しゅうして、買うてもらえん時には、自分が大きゅうなつたら必ず買おうと思ひよつたですけん」と、きじ馬が憧れの玩具だった頃を覚えてる年寄りが多い。

### 山野に落ちのびた平家一族が都を偲んで

壇の浦の戦いに敗れ、球磨地方まで落ち延びてきた平家の一族が、都の栄華を思う寂しさを慰めるために作つたと、言い伝えられている、きじ馬と花手箱に込めた山里の民の自尊心が切ない。九州にしか見られない「きじ馬」は、九州山地の球磨地方で作られ、何時しか筑後川より南部の平地に「きじ車」として広まったのである。

きじ馬の頭に書かれる大の一字は、落人伝説のある大塚地区のきじ馬を作る家に養子として入り込んで、その秘伝を盗んだ若者が、後世その罪滅ぼしと感謝の念を込めて書くようになったと言われている。おそらくは親でもある作者が、子供らに託した「身も心も大きく育て」との願いが「大」の一字に込められているのであろう。そんな思いの託された玩具で遊ぶ子供らは、幸せである。

### 博覧会や国際見本市で評価されて、住岡忠嘉さん

地元の農家を対象として作られていたきじ馬を、全国的に広めたのが、住岡忠嘉さんの父喜太郎さんであった。喜太郎さんは89歳で亡くなる直前まで、きじ馬を作り続けた。

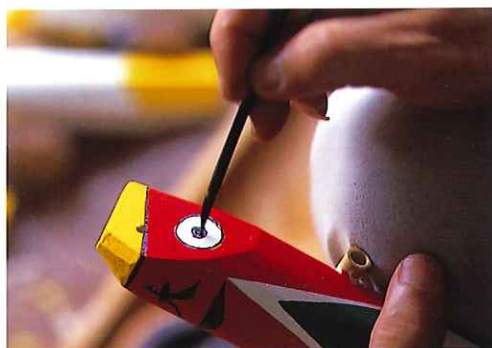
もとは仏壇を作る職人だった喜太郎さんは、山持ちとして戦前の地元有力者だった片岡家から、きじ馬と花手箱を作る許可を受けた。

### えびす市できじ馬を買う

2月になると毎年、熊本県人吉市周辺町村では、「えびす市」が開かれていた。特に二日町と七日町では、男の子に「きじ馬」、女の子には「花手箱」をお土産として買って帰る習慣があった。

「まだ冷たい市風に子供を当てると風邪をひかんと言われよりました」と、きじ馬の職人住岡忠嘉さん(64)は、昭和40年頃まで続いていた春の市の賑やかさを懐かしがった。

昔、きじ馬作りは木製品を作る木地師の余技であった。春の市が盛んな頃までは、20軒



始めは、仏壇の合間にきじ馬を作る程度だったが、昭和24年に人吉市で開催された「こども博覧会」にきじ馬を出品した頃から本業となった。昭和26年には、第一回熊本県土産品コンクールで特選を受けるなど、喜太郎さんがきじ馬を積極的に外に出す努力を続けたお蔭で、きじ馬は、郷土玩具の西の横綱と言われる程の知名度を得ることになった。昭和36年には、大阪の国際見本市に出品してバイヤーに認められ、スイスに5000個のきじ馬を輸出した。当時はまだ、家の軒下が作業場で、50個作るのに一週間もかかっていた時代である。

そんな家庭に育った住岡忠嘉さんは、「物心ついた時から家の中には、きじ馬があつたし、親父のことを目で覚えていたですけんね」ときじ馬のない人生は考えられなかったようだ。10歳代には、きじ馬の色付けをしたり、花手箱の絵を描いていた。

「画家は夢みて、絵が好きだったもんで、いっちゃん苦にならんかったですな」

昭和40年代から自然と、父親に替わってきじ馬、花手箱を作るようになった。

きじ馬の材料は、ホウ、ガラ、ハゼなどの白く柔らかい木を使う。昔は、燃料として伐り出した木から、原材になるのを農家が持って来ていたが、今は、製材所で仕入れる。始めにノコで輪切りにし、ヨキ(鉋)で荒削りをする。その後、セン(カンナ)や平カンナ、反リカンナで形を整える。紐はシュロの葉、車は松と決まっている。今では、色付けに化学塗料を使っているが、本来は、くちなしの花の黄、麦穂の緑、イセビの実の赤を使うものであつた。

## 「一日に300個削らんば、飯は喰えん」 宮原健雄さん

人吉市にはもう一人、きじ馬を作る職人宮原健雄さん(73)がいる。

宮原さんは、郷土玩具を土産物と割りきり、徹底的に効率を上げる工夫をした。結核を患い、手術であばら骨を7本抜いたばかりの40歳の時、体に負担をかけないでできる仕事を探していた。たまたま遊びに行った友人の家で、おじいさん達が3人掛って、一日80個あまりのきじ馬をノミで削る仕事をしていた。

「一日に2、300百個も削らんば、飯は喰えんどもん」と、啖呵を切った宮原さんは、その帰り道に「飼葉切り」の刃を買って、自分で台を付け、たった一人で一晩に300個のきじ馬を削った。

この時から、宮原さんのきじ馬人生が始まった。数を作る分だけ売らなければならぬ。熊本県の大手バス会社へ行ってツアーを組む時の記念品として納入する契約を手始めに、お土産品店やホテルに売り込んだ。33年間経った今では、工場と内職を合わせて15人で作るほどの規模になっている。

お土産としてきじ馬が売れるようになっても宮原さんは、「現代に合おうと合うまいと、歴史が培ったものを壊してはならない。新製品を出して一時的に売れても、長続きはしない」と自らを戒めている。



作業をする宮原さん。下は工房前できじ馬を持って。



▲きじ馬に車をつけた「きじ車」も人気商品。

・住岡工房(錦町) ☎0966(38)1020  
・宮原工芸(人吉市) ☎0966(23)3070



## 郷土玩具、民芸品を展示する施設・工房



「日本玩具歴史館」建物と内部展示室(右)



### 日本全国の郷土玩具 3万5000点を展示 「日本玩具歴史館」

(新潟県朝日村)

朝日連峰の麓にある朝日村は、自然の恵みと文化、歴史、ふれあいの場として「みどりの里」を開設、村の特産品を展示販売する「物産会館」古く民家をそのまま移築した「またぎの家」、休憩・宿泊施設「朝日まほろばふれあいセンター」、そして郷土玩具を展示する

「日本玩具歴史館」を一堂に配して、観光の里づくりに取り組んでいる。日本玩具歴史館は、府中市の故石上學博士が40数年にわたって全国から収集したもので、二階建て367㎡の中に、北の大地(アイヌの人々が伝えた「ニホボ、アイヌ船」から南の島島の民芸品・玩具まで約3万5000点を展示している。今では姿を消した貴重なものが多く、また、ままごと道具やからくり玩具、外国の玩具などもあり、幼い日の思い出や夢に満ち溢れている。

入場料 大人420円 小中学生210円 休館日は毎月月末の月曜日 ☎0254(77)1551

遊んで、学んで、体験する自然郷に  
「全国郷土玩具館」

(群馬県上野村)

神流川の美しい溪流沿いに国道299、462号が走り、その道路沿いに数々の施設が作られている上野村は、「遊んで、学んで、体験できる」楽しさ面白さいっぱい、の山村リゾート地。そのルートのほぼ中央に昨年「全国郷土玩具館」がオープンした。

日本独自の伝統的な遊具約1万5000点を収蔵し、都道府県別に展示している。また、上野村の森の文化を象徴する「からくりモノメント」では、各地のからくりを取り入れ実際に動かして遊べるコーナーを設けているほか、各種の木をつかってその素材の特色と魅力をいかした新しい木製玩具コーナー、上野村に残る(おひながゆ)のジオラマ等を展示している。二階は企画展示室で、テーマに沿った郷土玩具を定期的に紹介

### 高齢者が民芸品作り 白川郷合掌造りの里

(岐阜県白川村)

世界文化遺産に登録されて4年



している(全国の凧、祭りに登場する面や笛太鼓、正月用具等)。近くには南欧風リゾートホテル「ヴィラせせらぎ」があり、乙父トンネルの先には木工などが楽しめる「森の体験館」、木製品を展示販売する「銘木工芸館」等がある。

入場料 大人500円 小中学生200円 休館日は毎週木曜日(祭日の場合は翌日) ☎0274(20)7070

たつ五箇山・白川郷合掌造り集落。世界遺産といっても、遺跡や自然遺産と違って、そこで住民が生活しているため、民宿をやり、棚田や畑を作り、食堂や土産店を営むなどして生計を立てている。白川村では幸い年間100万人の観光客が訪れるため、経済的には安定、若者がUターンし、都市から嫁いできたお嫁さんも多い。

村では、雪国の暮らしと伝統を観光客に理解してほしいと、昨年「じば工房」を開設した。村の高齢者によるじば産組合(地場と爺ばばをかけた言葉)を設置、村役場にほど近い飯島地区に作業と作品を展示販売する民家を作り、そこでお年寄りガワラジ、ワラ人形、古い布を活用したパッチワークの小物、木製品等を作っている。

じば工房の作る商品は村内の土産店でも売られ、好評を得ている。今までの土産品の多くが松本や高山等から取り寄せた村外のものが主流だったことから、今後は白川郷の農家の暮らしや雪国の生活の中で使われ、伝承されてきた民芸品を観光客にアピールし、高齢者の生きがいづくりに役立てていくというつもり。

白川村では、合掌造り集落の自然景観を保全していくため、棚田



▲ワラ、草で編んだワラジ  
▼松カサを飾った籠。



の育成から花と緑のまちづくり、地元産そばの提供等に力をいれてきたが、これからは郷土玩具や民芸品も加わって、住民の生活に根ざした観光地をめざしていく。

じば産組合  
☎05769(0)1330

楽しい木製玩具の館  
「きつつき玩具工房」

(富山県利賀村)

利賀村の観光名所「限想の郷」へ行く途中に手作りの玩具と各地から収集した郷土玩具を展示する工房がある。利賀村役場職員中谷信一さんと父親に太郎氏が共同で営む「きつつき玩具工房」。中谷さんは知る人ぞ知る玩具作家で、受賞作も多い。同工房のヒット作は「木挽き」からくり人形。他に鳥、動物等の個性的な木の温もりにあふれた手作り玩具がいっぱい。  
☎0763(68)2149



## 全国過疎問題シンポジウム

'99 in ふくしま (福島県 郡山市)

■テーマ (新たな時代の過疎対策)  
21世紀の真に豊かな  
国民生活実現のために



### ■日程と主な内容

- 11月9日(火) 基調講演  
阿部 統 (東京工業大学名誉教授)
- 11月10日(水)  
分科会 (郡山市「ビューホテルアネックス」)
  - ・第1分科会  
「風格ある国土・新しい居住空間」
  - ・第2分科会  
「未来へのキーワード『広域化』の探求」
  - ・第3分科会  
「地域産業活性化による自立への道」

### 編集後記

▼戦後の焼跡で育った我々にとって、空地で拾い集めたクギや鉄板は貴重な遊び用具だった。カバヤやグリコのおまけ、油や蠟で硬めたメンコ、研ぎ上げた金属コマ等がいついば詰まった宝物箱はいつか手元から消えてしまったが、手作り玩具達への熱い思いは何時までも心の引出しに詰まっている。今回の特集では、これらの子供用の遊び玩具も取材しなかったが、該当町村では見当らなかった。

▼伝統ある郷土玩具・民芸品を中心に紹介することになったが、いずれも工芸品として優れたものばかりで、工人の技と伝承への努力に心から敬服する。経営は苦しく根気もある仕事だが、童心に返り夢を託して創作しているせいだろう。皆とてもいい顔していた(A)

## De POLA NO.17

[でぼら] '99 秋冬号

発行日/平成11年9月15日

発行所/全国過疎地域活性化連盟

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-24

オカモトヤビル8階

☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602

編集協力・印刷/株式会社 ぎょうせい

協力/編集工房アド・エー/地域活性化センター

## INFORMATION

### 世界80カ国の玩具が勢揃い 「日本玩具博物館」

(兵庫県香寺町)

姫路城から北へ約10kmの田園地帯に白壁土蔵造りの建物が6棟。日本の郷土玩具、駄菓子屋の玩具、世界80カ国から集めた人形・玩具がそれぞれ建物の常設展示されているほか、季節毎に話題を集める特別展示も開催している。

当館の特色は、井上重義館長が収集したものを中心に大勢の人形コレクターが寄せてくれた貴重な資料を約5万点所蔵し、それを順次公開していること。昭和49年に井上館長が私費で設立したが、以後施設と内容の充実を図り、昭和59年に館名を現在名に変え、さらに大きく発展した。

入場料 大人500円 小人200円 休館日は毎週水曜日  
☎0792(32)4388

### 東北地方の土人形を中心に

#### 「三春郷土人形館」

(福島県三春町)

### 全国の土鈴が1万点!

#### 「日本土鈴館」

(岐阜県白鳥町)

土鈴の歴史は縄文時代にさかのぼり、ねずみ除け、熊除け、虫封じ、商売繁盛と、古くから愛用されてきた。

同館では、神社仏閣より授けられる授与鈴、古来の縁起鈴、干支鈴、土産鈴など1万点を展示している他、「ふるさと館」では郷土玩具約2万5000点を展示している。

入場料 大人300円 小中学生200円 年中無休  
☎0575(82)5090

### 平成10年度制作ビデオ「歴史おもてなし 町並み保存と町づくり」

(30分・VHSカラー)が、つぎの賞を受賞しました。

第37回日本産業映画・ビデオコンクール 観光部門賞

第45回優秀映像教材選奨(通称・教育映画祭)ビデオの部・社会教育部門優秀賞

岡山県勝山町、広島県豊町、愛媛県内子町は、昔からの町並みを保存し積極的に活用して地域の未来をつくるエネルギーを生み、古い家屋やそこに根付いた文化は、遠

方からのお客に歴史おもてなしとなっています。これらの町を訪ね、親しみやすく紹介しています。



勝山の高瀬舟の発着場跡



御手洗の保存地区の町並み



町の文化活動の拠点「内子座」

## 歴史おもてなし

町並み保存と町づくり

### 岡山県勝山町

昭和60年に県「町並み保存地区」に指定された。町の有志がのれんをかけようということで「町並み保存事業を応援する会」を結成。のれんは地区内に草木染めの工房を持つ加納容子さんがデザインした。人々はこのれんで町並みを見直し大切にようになった。

### 広島県豊町

御手洗地区が、国の「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されたのは平成6年。町の人々は「重伝建を考える会」を組織し、瀬戸内海の潮待ち、風待ちの港として栄えた町の歴史や文化の勉強を始めた。ボランティアガイドの一人、壺屋の長浜さんもすっかり町の歴史の虜になって、訪ねる人々に歴史や文化を語っている。

### 愛媛県内子町

八日市護国地区が、国の指定を受けたのは昭和57年。保存事業が始まって18年たった。床屋や美容院なども営業している町を歩くと、人々の暮らしや息遣いを感じられる。「町並み保存」から「村並み保存」の運動に発展した山間の石畳地区では、水車や棚田の復元に取り組んでいる。民家を移築した「石畳の宿」も好評で町との交流も進められている。

いい夢、咲かそ。



●本誌は財団法人日本宝くじ協会の助成を受けて作成されたものです。

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。

宝くじの収益金は、公共事業に役立っています。

